江戸人の不思議の場所

——その人文主義地理学的考察——

内田忠賢

はじめに

本稿の目的は、江戸後期の江戸の町人が感じていた「不思議の場所」を記述することである。この「不思議の場所」とは妖怪現象が発生する（と人々が感じる）空間、つまり妖怪が出現したり、霊験が起こる空間であると、定義しておく。[1] 従来、この空間に対して若干の民俗学者が関心を示したにすぎず、筆者が属する地理学では最近、水津一朗が中世説話を史料として言及したに過ぎない。[2]

しかし「不思議の場所」は人文主義地理学 Humanistic Geograpy の格好の研究対象である。[3] なぜなら妖怪現象は想像力の産物であり、それを実現する空間も想像力により生み出され、意味付けされた空間であるからである。そして、ある人々はこの空間から意味を感じ取る。また「不思議の場所」は個人の幻想であると同時に、彼と社会的・文化的背景を共有する人間集団の共同幻想である場合が多い。この共通主観 intersubjectivity に関わる空間に人文主義地理学は強い関心を示してきた。

ここで本稿の意義を指摘しておきたい。第一に人文主義地理学の事例研究である。この立場の研究は、そのアジテーションこそ声高であるが、事例研究は少なく、日本に限れば皆無に等しい。[4] 第二に「記述」による研究である。この立場に立つ地理学では研究者の常識的な「分析」は慣習に過ぎないとして排し、空間や景観の「記述」を最重視する。[5] 本稿でも「場所」の「記述」を心がけた。

① 妖怪及び妖怪現象について小松和彦の定義を参考とする。小松は妖怪を「世界に生起するあらゆる現象・事物を理解し秩序づけよう

と望んでいる民俗社会の人々がもつ説明体系の前に、その体系では十分に説明しえない現象や事物が出現したとき、そのような理解しがたいもの、秩序づけできないものを、とりあえず指示するために用いられる語」と定義する。本稿では小松の定義によるに妖怪を「妖怪現象」、妖怪現象を生む存在を「妖怪」ととりあえず定義する。したがって神仏に関わる奇蹟、すなわち霊験も妖怪現象に含める。小松「魔と妖怪」宮田登編『日本民俗文化大系四、神と仏』小学館、一九八三年、三四五頁

② 水津一朗『景観の深層』地人書房、一九八七年、一七五～二五八頁

③ 人文主義地理学は、景観・空間の感情・価値感・想像力などに関する側面を研究する立場である。また本稿で「場所」と表現する場合は人文主義地理学の場所 place 概念を念頭に置く。詳しくは拙稿「場所の理解――Yi-Fu Tuan の著作に関する覚書――」現代風俗研究会編『ノスタルジック・タウン』リブロポート、一九八七年、六八～八一頁参照。

④ 筆者はかつてこの立場から歌謡・説話の解読を試みたことがある。拙稿「古代日本の国見に関する一考察」人文地理三七―四、一九八五年、七七～八五頁。

⑤ 旧来の実証科学とは異なり、理論化を目指すことなく本質に迫る現象学的な方法論である。山野正彦「人文主義地理学」坂本英夫・浜谷正人編『最近の地理学』大明堂、一九八五年、二三八～二四六頁

第一章　不思議の場所をめぐって

前述のように、この議論は日本民俗学で民俗空間の問題として扱われている。[1] この嚆矢は柳田国男の研究と位置付けるべきであろう。柳田は伝統的な村落での妖怪現象のポイントとして特定の空間への出現を挙げている。[2]

「昔から妖怪は、必ず路傍に出て通行人を嚇かすのが原則であった。つまり小売商が市街に面して店を開くがごとく、怖がる人はすなわち妖怪の花客であったためで、殊に峠と坂、湯と橋などはかれらの業務を行なうに最も適当な地点であったのである。」

柳田以降の研究者はこの指摘をほぼ踏襲している。宮田登もこれを受けて、

「妖怪変化、それに伴う超常現象、神秘的現象が生じやすい場所が、民俗的空間のなかには存在している。」

とした上で、本稿で言う「不思議の場所」は村落と都市に共通すると指摘する。[3] ところが宮田の所説は時代・地方ともに多様な事例に依拠しており、彼の一般化には疑問が残る。

まず都市と村落の「不思議の場所」は同じであろうか。宮田の言うように都市でも辻・橋が「不思議の場所」であるかを本稿で確認したい。従来、民俗学者たちが念頭においた研究対象は、常民社会、つまり近世後期の村落である。そこで本稿では近世後期の大都市江戸を対象にする。しかもこの時期の江戸では人々の妖

怪イメージは非常に豊富であったという。④

次に「不思議の場所」を感じる主体が従来、不明確であった。本稿では下町に住む町人層を念頭に置く。彼らこそ最も都市的な生活を送る人々であり、豊富な想像力の持ち主であった。また彼らが生活世界の中で感じる妖怪は、他の時代に比べれば、権力や差別の象徴と言うよりは不可思議さそのものの表象であると考えられる。⑤

従って町人の受容した「不思議の場所」を伝える史料を検討しなければならない。管見の限りでは史料として世間話と怪異小説が最適であろう。巷説としての世間話と夜伽の際の語り物・読物としての怪異小説は、町人が受容したことが確認できる数少ない在地の口承文芸史料である。そして後に詳しく論ずるように世間話は彼らの現実世界の生活感情を、怪異小説は彼らの空想世界の感覚を的確に伝えている。語られる場を考えるとそれぞれが彼らの昼と夜の世界を伝えていると言うこともできよう。また史料として従来、後者はごく少数の文学研究者以外には無視されるか、両者の性格が異なるにも拘らず混用されていた。この両者を区別して検討してこそ江戸人の感性の一端に迫ることができるだろう。

また「不思議の場所」を検討する際、空間のレヴェルを分けた。これは小松和彦の説得力のある所説を参考にしている。⑥彼によれば村落の「不思議の場所」は何段階かの空間のレヴェルに対応して存在する。それぞれの空間は一種の小宇宙を形成しており、その中の境界的位置に「不思議の場所」が存在する。この単位として村落では家屋とその上位のムラ空間が重要である。従って本稿では空間の単位として家屋や都市などに注目したい。

① 民俗空間とは心意的・伝承的な空間である。この問題は別稿で論じた。拙稿「場所の意味論――民俗学と地理学の接点――」京都民俗五、一九八七年、四一～五〇頁

② 柳田國男『妖怪談義』定本柳田国男集四、筑摩書房、一九六三年、引用は一〇三頁。

③ 宮田登『妖怪の民俗学――日本の見えない空間――』岩波書店、一九八五年、一二〇～一六七頁、引用は一二一頁、また『終末観の民俗学』弘文堂、八一～一五二頁

④ 野口武彦『江戸百鬼夜行』ぺりかん社、一九八五年、五～二二頁

⑤ 横井清「妖怪たちの環境」『月刊朝日百科・日本の歴史一三』朝日新聞社、一九八六年、五九～六四頁

⑥ 小松和彦「魔と妖怪」宮田登編『日本民俗文化大系四、神と仏』小学館、一九八三年、四〇四～四〇七頁

第二章　世間話にみる江戸の不思議の場所

本章では、江戸後期の江戸人が現実の都市空間の中で感じていた「不思議の場所」を世間話を史料に記述したい。

1　世間話と場所

世間話とは、ある時代に生きた人々が同時代に起こった出来事に基づいて伝承した民話の一形態、である。[1] この世間話が本章で有効な史料となる理由を述べたい。

世間話はその時代に生きた地域住民の想像力、生活感情の諸相をよく反映すると言われる。そして完全な事実のように伝えられるという特徴を世間話は持つ。[2] その内容はまったくの虚偽ではなく、何らかの事実に基づくと思われる。日野龍夫は次のように述べる。[3]

「事実で無ければ、見知らぬ世界へのチャンネルではありえない。（世間）咄のもたらす緊張、恐怖は、その世界の確からしさ……」（括弧内筆者、傍点日野）

また戸塚ひろみは次のように主張する。[4]

「単に体験が珍奇だけでは、世間話は成立しない。その体験がなんらかの意味づけをされ、人の共感を呼び、はじめて世間話となる。……都市では刺激的な事件が続発し、話題が豊富すぎて、世間話は定着する間もなく、あわただしく去ってゆく。それだけに特定の場所や建物には世間話が引き寄せられる」（傍点筆者）

世間話にはリアリティが必要である。そのリアリティを保証する役割を世間話と特定の空間の結び付きが果たすように思われる。例えば「なるほどあの場所なら妖怪が出るかも知れない」と人に思わせるリアリティである。このリアリティ即ち伝承されうる必然性の認識は、語る側と聞く側に共有されると考えられる。[5] つまり世間話で語られる「場所」は体験（をしたと伝えられる）者にとって「場所」であると同時に、世間話を伝承・受容する人々にとっても「場所」なのである。

2　史　料

本章で参考にする史料は、日本随筆大成・日本庶民生活史料集成・江戸叢書などに翻刻・所収されている江戸後期の世間話（特に怪異譚・霊異譚）から選んだ。これらの世間話の特徴を整理しておきたい。

1．伝承者・筆録者と同時代の出来事である。

2．筆録者による内容の改変が無い。例えば『耳嚢』の序文で筆録者、根岸鎮衛は

「古老の物語は閑居へ訪来の人の雑談にとどまりて面白き事ども……聞きし儘しるしぬ。市中の鄙語など誠に戯れ言なれど、これも聞きしままに洩らさず書き綴りぬ。数多きうちに

は偽の言葉もありぬべけれど、語る人の偽は知らず、見聞きし事を有りの儘にしるして、余が子弟に残し置きぬ。」と記している。[6] 文学史的研究によれば「聞きし儘しるしぬ」という態度は本当らしい。[7]

3．話中の人物が実在し、実名で記される。

4．情報提供者の名前、提供者と事件の体験者との関わりを記す場合もある。筆録者は間接的に話題を採録するに過ぎないが、この場合はデータの信憑性の高さを示す。

5．江戸を舞台とする話題が多い。しかも詳しい地名が記されているので、世間話を伝承する人々は特定の地名からある種の場所のイメージを感じていたと思われる。[8]

この五点のなかで2・以外は江戸人にとって世間話のリアリティを保証すると考えられる。

3　江戸の不思議の場所

本節では江戸という都市の「不思議の場所」を世間話から探る。但し前述のように「不思議の場所」は様々な空間レヴェルに対応して存在すると考えられるので、本節では次の様な空間レヴェルを設定し、その記述を行う。

まず空間レヴェルを家屋内部と家屋外部に分類・設定する。後者では江戸という都市空間を江戸人にとっての小宇宙として考えるのが適切であろう。[9] また事例から判断すると大名屋敷など広い屋敷地が閉じた空間として重要である。この屋敷地という空間は家屋内部や江戸という空間とレヴェルを異にしているので、さらにレヴェルを設定する。つまり以下(1)市中レヴェル、(2)屋敷地レヴェル、(3)家屋レヴェルという三段階の空間に分類して「不思議の場所」を記述する。

(1)　市中レヴェル

江戸の人々が六ヶ所の大木戸より外側に容易に出られぬことは周知の事実である。反対に「江戸払い」でも知られるように、江戸に入ることも簡単ではなかった。まして町人は神田・日本橋を中心とする下町に住み、彼らの日常的な生活圏は下町を越えなかったと言われる。したがって町人にとって江戸市中は閉じた小宇宙と感じられたに違いない。

本小節では、江戸市中のどの地区に怪異譚・霊異譚が多く伝えられているか、つまり江戸市中での江戸人が感じる「不思議の場所」を問題とする。最近、村落空間をムラ人にとっての小宇宙として理解する民俗空間論が人類学・民俗学の分野で議論されているが、本小節の視点はここから発想を得ている。[10]

以上の問題意識で考察を進めるために適切な史料は、ほぼ同質で数多くの事例を抽出できるものが望ましい。管見の限りでは先に触れた『耳嚢』が最も適当だろう。このテキストには対象となる事例は六六例（第1表）あるが、事例の抽出の際、次の二点に留意した。

まず市中レヴェルで議論するため、地名比定が出来ない事例は除外した。[11]

次に世間話が伝える情報についてである。世間話に含まれる怪異譚・霊異譚は、大まかに状況（時刻・天候・地点など）・現象・説明（体験者・伝承者の現象に対する、後の解釈）の三情報から成っている。本章は状況と現象の関連に着目している。説明部分を軽視した理由は、この部分を伴わない世間話が多いこと、江戸人が真に不可思議と思ったのは現象の部分であると思われることである。

以上の手続きで、第1～3図を作成した。これらの図から読み取れる傾向を略述する。

〈全体的傾向〉　世間話の伝承主体たる町人は神田・日本橋を中心とする下町を日常的な生活空間としている。一方、「不思議の場所」は下町（中心部）を取り巻く周縁部に分布する。第1表では江戸より外側の近郊地区の事例を含んでいないが、史料の中でこれに該当する事例はほとんど無い。ちなみに怪異譚・霊験譚以外の一般の世間話は下町の話題が多く、江戸近郊の話題は非常に少ない。また町人が気軽に物見遊山にゆく名所は江戸の周縁部に多く位置することを考え合わせると、彼らが周縁部に非日常的な空間を求め、感じていたと思われる。[12]

また「不思議の場所」は江戸の北半に比較的に多く分布する傾向もある。一般の世間話も『耳嚢』の場合、北半を舞台とするものが多い感がある。したがってこの傾向は「不思議の場所」の本質とは必ずしも関わらないように思われる。そこで『耳嚢』に共通する性格を持つ別の史料『甲子夜話』（一九世紀初頭、松浦静山筆録）を検討する。[13]この史料による事例は一二例に過ぎず、現象も多様だが、「不思議の場所」は江戸の東北部に偏在することが容易に判る（第4図）。この史料の他の世間話も江戸城や筆録者の屋敷付近など江戸の東北部を舞台とするものが多い。このことから世間話の情報源の場所的な偏りが推定される。つまり筆録者及び情報提供者の交際・行動範囲などの偏りである（以下第1～4図、参照）。『耳嚢』の筆録者、根岸鎮衛は南町奉行所（丸の内）に勤務、また『耳嚢』の大部分を執筆したとされる彼の屋敷は神田駿河台表猿楽町にあった。[14]一方、松浦静山の上屋敷は浅草元鳥越町、下屋敷は本所中ノ郷にあった。[15]したがって根岸は江戸

第1表　『耳嚢』にみる江戸の怪異・霊験

巻	譚	時刻	地名		空間		現象	説明
1	怪異	?	仙台河岸	伊達侯蔵屋敷	佐賀二丁目（切）	堀	河童が現われる。	
	霊験	（夜）	浅草	大たんぼ	千束三丁目（切）	—	大火の混乱の中で救い出される	神仏の助け給へるならん
	怪異	?	小日向あたり		—	屋敷	怪僧が他人の筆記能力を借りる	
2	〃	朝	山王永田馬場あたり		平河二丁目（切）	大名屋敷	蛇が天に昇る〔雲・雨〕	
	〃	〃	赤坂		—	大名屋敷	〃	
	〃	〃	芝		—	大名屋敷	〃	
	〃	昼	駒込あたり		—	屋敷	母親が猫の姿になる	猫のついたという者の由
3	〃	夜	番町		—	屋敷	鯰（まみ）という妖獣（妖怪）	（いかなるものなるや）
	霊験	?	浅草	新堀の川端	不明	—	大火の混乱の中で救い出される	一心に信仰をなす所には奇特もあるものなり
	怪異	?	本所	割下水	（割下水は南・北にある）	町屋	女性に憑きものが起こり、予言を当てる。	狐がつく
4	〃	黄昏	（芝）	西久保	西久保巴・桜川町（切）	大名屋敷	蝦蟇が遠くの虫を吸い付ける	年経し蟇の人気を吸わんも空事ならず
	〃	?	上野		—	寺院	蝦蟇が鼎に気を吹き、とかす	（十年余も生き候えば、すべて物は申すものにて、それより十四五年も過ぎ候えば神変を得候事なり）
	〃	?	牛込	山伏町	南・北山伏町	寺院	猫が人語を話す	瘧病の気の雨中に形容をなしたるらん
	〃	夜	番町馬場の近所		一番町（切）	四辺打ちはれたる道	妖怪に会う	
	〃	?	（千住）	真崎	南千住三丁目	—	娘に狐が憑き礼を言う	
	〃	?	本郷あたり		—	大名屋敷	稲荷の大破の修理依頼人が不明	狐などのしわざや
	〃	?	番町		—	屋敷	小児が納戸で消え、三日後納戸に現われる	（いかなる事にてありしや）
	霊験	?	目黒不動		—	—	門番が悪事を行なうたびに、眼を病む	仏間を受けしなり
	怪異	?	麻布辺			屋敷	娘が原因不明で妊娠　腹中より声	（いかなるものや）

5	〃	夜	(牛込)	改代町	改代町	町屋	かまど	かまどの中から坊主が手を出し、夜具がはね回る	念残りしや
	怪異	夜	牛込辺		―	町屋		修験を冷くあしらった後、夜具が物を言う	修験忿恚執着
	霊験	？	浅草	蔵前	―	―		偶然が重なって命びろいをする	観音の利益、知音の信切
	〃	？	駒込大観音あたり		―	―		夫の見た面が妻の夢に現われ、面を祭り繁盛	木面を得て幸いあれ
	〃	？	本所	中の郷	吾妻橋二・三丁目(切)	川端		夢に見た水神像を祭り繁盛	水神を夢みて幸いを得し
	怪異	？	霊岸島辺		新川一・二丁目(切)	町屋		疱瘡を病む小児が予言を当てる	狐狸妖獣の類、無心の小児熱に専わるるに乗じぬるもあるらん
	〃	？	本郷	富坂	小石川二丁目(明)	大名屋敷		狐が夢の中で報恩する	
	〃	？	本所		―	屋敷		下女に憑きものが起こり予言を当てる	狐つきし
6	〃	？	(芝	愛宕町)	―	大名屋敷	庭	庭石が鳴動する	(昔、庭で切腹をした為)
	〃	？	四ッ谷あたり		―	屋敷	庭	狐が子供を隠し殺すという復讐を行なう	
	〃	夜	小石川	くらやみ坂	不明		庭	幻僧が妙薬を教えた後、消える	
	〃	？	番町辺		―(切)	屋敷	縁	猫が語を話す	
7	〃	？	小日向	江戸川端	春日・後楽一丁目？	屋敷	庭	稲荷の祠を移しても、元に戻る	狐は霊獣ゆえかくなしける
	〃	？	四ッ谷		―	―		疱瘡を病む小児が予言等を語る	いずれ疱瘡には鬼神のよる所もあるにや
	〃	？	本郷	信光寺店	本郷五丁目(真光寺)(切)	町屋		山伏が来て火事を次々と予言する。	狸のいたずらにやあらん
	〃	？	〃		―	屋敷		狸の怪	
	〃	(夕)五ッ半ごろより前	本郷あたり		―	道・町屋		狸が下女に化ける	古狸にてありし
	〃	夜	(四ッ谷)		―	道		「腰より下は見えず、貌大きなる眼ひとつ」の妖怪（大きなるごい鷺）	
	〃	昼	(牛込)	加賀屋敷原	(尾州屋敷辺)(砂子の残月巻9)	原		つむじ風に巻き込まれた子供に足跡が付く	かまいたちといえる獣、風の内にありしや

10											9							8
〃	〃	〃	怪異	霊験	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	怪異	〃
夜	？	？	？	？	？	夜	？	？	？	夜	？	？	〃	昼	夜	暮れ合い	暮れ過ぎ
日本橋	（大久保）	浅草	神田	浅草	牛込大久保境	牛込	駒込	市ヶ谷	大久保本村もより	目白	浅草	内藤宿	虎の御門	音羽町	牛込	内藤宿（辺）	本郷
左内町	戸山屋敷	元鳥越町	佐久間町	田圃（幸竜寺）	若松町	山付町	富士境内	川田ヶ窪		水神橋	浅草観音						桜の馬場
日本橋一丁目（明）	喜久井町・戸山町（切）	浅草鳥越町（切）	—	千束？		南・北山伏町	—	市谷川田町（切）	—	目白不助付近か？	—	—	虎の門	—	—	新宿	湯島一丁目（吉文字屋版切）
町屋	大名屋敷	町屋	町屋	—	屋敷	大名屋敷	堂	大名屋敷	大名屋敷	橋	堂上・門上	屋敷	—	—	屋敷	道・屋敷	馬場
	庭				庭	庭						流し元			庭		
狸に悪きもの（狐か）が起こり、母とともに病死	小社に邪神が封じこめられる	〃	酒好きの父親の酒が消える。嫁に憑もの（狐か）が起る	夢中に猿が頭痛を直す	杏樹が血や煙を出す	石が馬に化けて走る	一本の松のようなものが炎を出し天に昇る。〔雲雨〕	〃	夢に老翁が現われ稲荷移転を止める。稲荷に札がある。	女の姿が消える、釣りの獲物（鰻）も消える	火のようなものが天に昇る〔雲・雨〕	小豆を洗う音がするが、姿はない	〃	麦飯を食べた客が鰻釣りを戒める。鰻の腹中に麦飯	狸が老女に化ける。	道に迷い、油を盗まれる。油に酔う狸がいる。	狸が娘に化け、心中を図る
狐崇り	みだりに口説にかけてはおしき品を先代封じ、社に崇め給ふ。	〃	霊気狐を頼み過酒を止めし事	祈願叶はざるなし	年古き化け杏樹		昇竜			全く狐に訛かされしならん。	潜竜上天	小豆洗いといえる怪、これ蓑の怪なり			古き狸なりし	まさしく狐狸にたぶらかされしならん。憎き奴が仕業なり	狸は人を欺き迷わす（その性魯鈍なる）

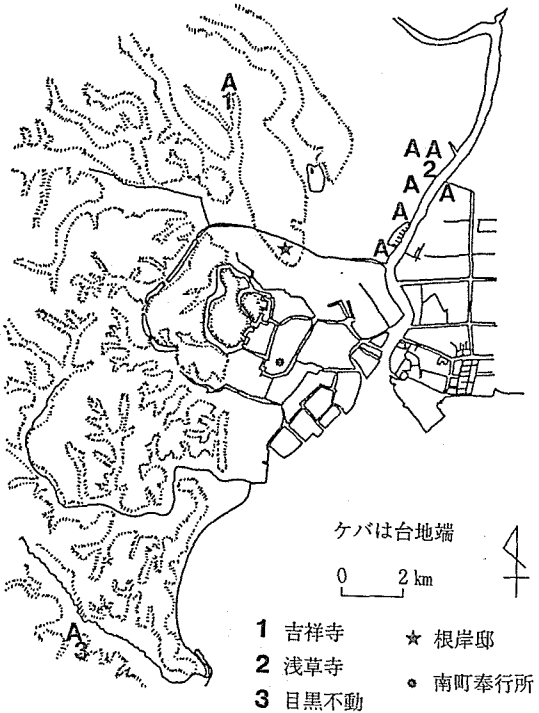
〃	(夜)	芝辺		—	屋敷	山(庭)	松を移すことができないが、説得すると移せた。	非情といえど松樹不思議
霊験	夜	浅草	福井町	浅草橋一丁目(明)	—		夢に大黒天が現われ、貧者が金を得る	大黒を祈りて福を得し事
怪異	(夜)	本所	(数原屋敷)	—	屋敷	倉	怪物(怖ろしき坊主やうのもの)が現われ倉を守る	古来より右倉内に怪物あり
〃	?	数寄屋橋外		—	町屋	戸袋	女が戸袋より現われ消える	
〃	〃	市ヶ谷辺		—	大名屋敷	庭	大工に狐が憑く	
〃	〃	番町		—	屋敷	庭	古石が人語を話す	石魂ありてかくありしや
〃	昼	浅草	幾町	蔵前三丁目(西福寺近所)(切)	—		「火玉様ようのもの」走り廻り、木より天に昇る	雷
〃	夜	吉原	江戸町	千束四丁目(切)	遊女屋		妖怪が人に化け遊ぶ	狸の化け来りにに違いなしとや
〃	(夕)五ッ時ごろ	(小日向)	桜木町荒木坂	小日向二丁目(明)	坂		屋台から油揚が消える	全く狐の仕業なるべし
〃	夜	巣鴨					見知らぬ者達が騒ぐ。見ると消える	全く猫の仕業なるべし

(注) 現地名の比定ににいて、①現地名も同じ場合は—で表示
②現地名に遺称が無い場合比定に利用したデータを明示
(切):『嘉永・慶応江戸切絵図』(尾張屋版)
(明):明治一四年迅速二万分の一地形図

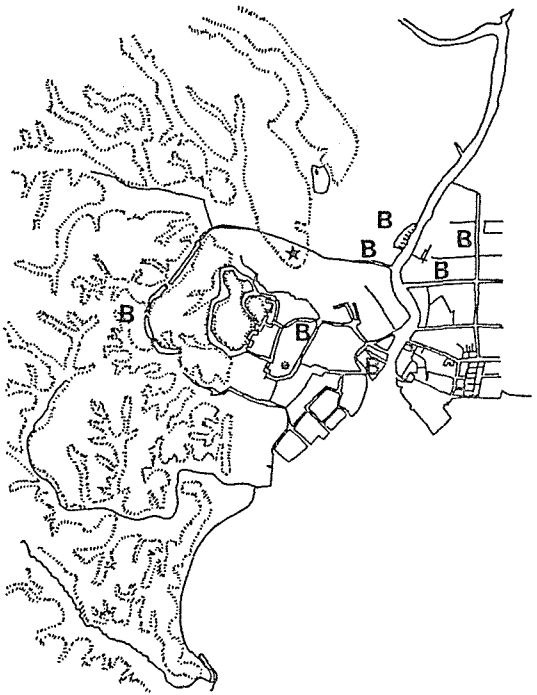
北半の、松浦は江戸東北部の情報を得易かったことが判る。つまり『耳嚢』における「不思議の場所」の偏在はその本質と無関係と考えてよかろう。

〈第1図　霊験〉　霊験が起こった地点は浅草付近に集中している。[16] しかもその霊験譚は浅草観音の御加護をモチーフとする話が多い。他の二例も有名寺社付近である。有名寺社付近は聖域と考えられ、奇跡を伝える霊験譚は生まれやすく、逆に霊験譚の集積により聖域性が高まると考えられる。[17] したがって霊験の起こる「不思議の場所」は浅草など有名寺社付近であると江戸人は感じていたのだろう。

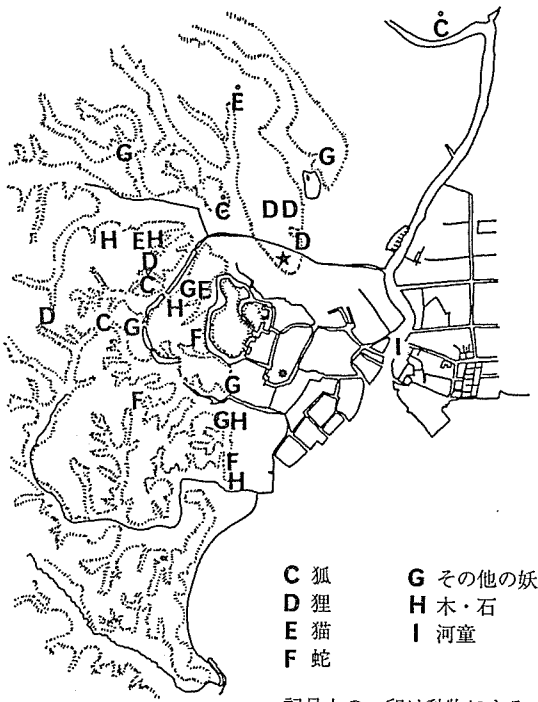
〈第2図　憑きもの〉　人間がトランス状態になり奇跡を起こす、いわゆる憑きものの発生地点は下町に集中する。憑きものの現象の多くは狐が憑いていると「説明」される場合が多いが、現象としては人間社会の病理現象のひとつである。[18] 人口密度の低い



第1図　霊　　験

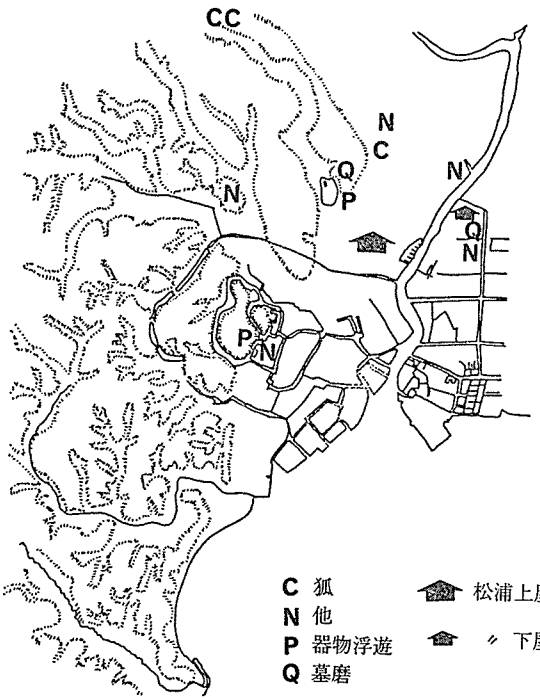


第2図　憑きもの



記号上の。印は動物による
憑きものを伴う

第3図　動物などの怪



第4図　『甲子夜話』にみる怪異

山手の大名屋敷・武家屋敷の地区で憑きものがほとんど伝えられないこともこれを裏付ける。[19] 従って憑きものの「不思議の場所」は人が密集する下町であると江戸人が感じていた可能性がある。[20]

〈第3図　動物などの怪〉　狐や狸が人間に化ける、猫や石が人間の言葉を話すなどの怪異は、一括して「動物等の怪」として扱った。この分布は第2図とは反対に山手（武蔵野台地）の台地端・台地上である。ここでの土地利用は大名屋敷・旗本屋敷などが広がり、民家はほとんど見られない。そして開発以前の自然が屋敷地に取り込まれながらも相当残っていたようである。[21] 江戸人が台地端・台地上の大名屋敷に「不思議の場所」を感じる理由として、次の二つが考えられる。まず人々が狐や狸に妖怪イメージを持っており、大名屋敷の庭はその生息地であったこと、[22] 次に大名屋敷などに町人は容易に入ることが出来ず、未知の領域であったこと、である。[23]

その他、未検討の事例があるが、現象が多様であり、事例数も少ないので市中レヴェルでの傾向は指摘できず省略した。

(2)　屋敷地レヴェル

江戸人が大名屋敷付近で奇妙な気分に襲われることは当時よくあったようである。

「夜五つ時頃には神楽坂より牡丹屋敷といふ所を通る時、そぞろにおそろしく覚えて……」（嘉永年間、鈴木桃野筆録『反古のうらがき』巻一）[24]

そして大名屋敷の中で動物などの怪がしばしば起こることは前述のとおりである。

「右近辺に屋敷の内、狸の怪ありし」（『耳嚢』巻七老僕奇談事）

屋敷地の中でとりわけ庭園および庭園に付随する林地で動物などの怪がおこることは、多くの世間話が伝えている。たとえばそれは第1表の「場所」の項目を見ても明かである。当時の大名・旗本屋敷なら敷地の半分以上、山手の大名下屋敷にいたっては敷地の大部分が庭園・林地であった。[25] しかも庭園は江戸式と呼ばれる山中を模した様式で、台地端の崖や林地を巧みに利用したものだった。[26]

「屋敷内不陸（平でない）にて、山あり谷ありけるが、熊笹おひしげる……」（『耳嚢』巻八、久貝氏狸を切る事、括弧内筆者）

「屋敷は半ば山……」（『耳嚢』巻一〇非情といへども松樹不思議の事）

屋敷地はこのような状況なので、狐や狸など人間と共生可能な動物が生息したのだろう。

さらに庭園の中でも築山が「不思議の場所」の中心地点であったようである。

「石川阿波守として御留守居を勤ける比、右家へ立入し茶師山上源兵衛といへる者有し。狐寝たるを驚かしける事有し由。或日阿波守坊主若侍共、屋敷の切戸庭杯掃除なし居たりけるが、ひとつの狐築山の陰より出て、築山の脇に露次を出て無程山を、源兵衛に化けたるぞ、表より來りなば補えて正躰顕せとて、棒箒杯引提内玄関へ廻りしに、誠の源兵衛中の口より例の通り上りける……」（『耳嚢』巻七、狐即座に仇を報ずる事）

「（飼犬が狂気の様子なので）祭酒公あやしみ玉ひて、縁の端に出て其様を見玉ふにものなし、蓮池のあなたなる築山の上狐にあり、心を付てみれば、此狐がおとがい（下顎）さし向てみれば、東に向へば犬東へ走り、西に向けば西に走るにてぞありける。これは希有のことよと見るまに、犬は走りつかれてこなたに倒れて伏しけり、暫くして築山なる狐は、おそるる色もなく、従者が投捨し食物を飽までたふべて走りけり……（家来が行方不明なので）あちこち尋ねさするに行衛なし……築山の陰なるすすきの生茂りたる中に、前後もしらず眠り伏たり、こは先の狐がなせるわざに疑ひなしとて、おそれあへる人も多かりければ……」（『反古のうらがき』巻二、括弧内筆者）

両方の世間話とも狐が霊力を発揮する地点として「築山」を記している。また後者の話で築山に「狐の穴」があると付け加えられている。つまり築山は狐が生息する空間であり、人間にとっての「不思議の場所」であった。したがって屋敷地レヴェルの「不思議の場所」は「大名屋敷など→庭園→築山」とズームインするように思われる。そして「築山」に何らかの意味が潜むことも考えられる。[27]

さて管見の史料では江戸後期の江戸において村落モデルの「不思議の場所」はほとんど見られない。第1表でも橋が「不思議の場所」として扱われる一例（巻八）を見るのみである。宮田登は江戸に関し「崖のふちや坂の途中などにはやはり怪異空間が存在する」とか「坂を通過する時、他界（異界）感覚に触れる」と述べる。[28] しかし坂が異界として存在するなら坂＝境という単純な認識だけでなく、台地端での大名屋敷の存在や狐・狸の生息などの多様な状況を考えるべきであろう。[29]

(3) 家屋レヴェル

次に家屋を小宇宙として捉えた場合の「不思議の場所」を検討する。

「（八歳になる娘が）納戸の内に缺入りしを、乳母は直に立て納戸へ押しつづき立入しに、娘の行方なしとの由奥方へしかじかとかたり、家中驚きて雪隠物置はゆふに不及、屋敷中くまなく捜せ共しれざれば……三日目に納戸の方にて右娘の聲して泣し故、捜しけれども見へず。又庭にて泣聲せし故缺出みれば右娘成故……右の様子を尋問しに、一向不覺由を右小女のいひしが、いかなる事にてありしや」（『耳嚢』巻四、小児行衛を暫く失ふ事、括弧内筆者）

これは「納戸」で少女が消えたことを伝える。類似の話は、「厠」で男が消え、二〇年後「厠」から男が昔と同じ服装で現れた話（『耳嚢』巻五、二〇年を経て帰りし者の事、但しこれは江州八幡の話）がある。

「本所にて御醫師にて敷原宗徳といへる人の屋敷に、古來より右倉内に怪物あり、藏内より物を取出候節も其度々、断候て取出し候由。断ざる時は甚だ不宜由。……或年類焼の節、藏は残りしが、家來の内、何程平日は断の上、物の出入いたし候共、非常の節は何かくるしかるべき、焼場故、臥所も無之迚、土藏の内へ入、物を片付、其所に臥りしに、暫くあり、こえ如何にも怖しき坊主様のもの出て、兼ねての極めを破り藏内へ立入、殊無禮にも臥りし事の憎さよ、命をも可取なれども、かかる非常のせつ故此度はゆるすなり、以来決して立入間敷旨申ける故、右家來は大いに恐れて早々逃出しとや。年々極めありて、祭禮などいたしける。（『耳嚢』巻一〇、怪倉の事）

この敷原屋敷の怪は『遊暦雑記』（一八世紀後半、十方庵筆録）にも「本所敷原氏石庫の妖怪」（二編下、七三話）として記される。[30] その他『耳嚢』に限っても町屋の「竈」からの坊主姿の妖怪が毎夜現れる話（巻五、怪竈の事）、「戸袋」から女が現れた話（巻一〇、房斎新宅怪談の事）などがある。

家屋レヴェルの「不思議の場所」は納戸・倉・竈などであると指摘できるが、この感覚は江戸市中に限られない。飯島吉晴によれば村落における家屋内の「不思議の場所」は納戸・倉・厠・竈などであるという。[31] したがって家屋レヴェルの「不思議の場所」は都市も村落も同じであることが推定される。

4 小結

本章では、世間話を史料として江戸後期の江戸人が、現実世界の中で如何なる空間を「不思議の場所」と感じていたかを記述した。その結果、次の四点が明らかとなった。

(1) 江戸人は江戸という小宇宙の中で、自分達の住む下町＝中心

に対し、周縁部に「不思議の場所」を感じる傾向がある。そして霊験・憑きもの・動物の怪、それぞれの発生が集中する地区があるように思われる。

(2) 動物の怪は山手の大名屋敷などの庭園で頻繁に起こる。庭園の中でも築山が「不思議の場所」の重要地点である。

(3) 以上の二点は江戸という都市独自の「不思議の場所」である。村落のそれとは異なる。

(4) 家屋の中の「不思議の場所」は江戸でも村落と同様であると思われる。

最後に次の三点を付記しておきたい。まず夜の問題である。この時代に同じ空間が昼と夜で異なる感覚を人々に与えたことは想像に難くない。しかし第1表の「時刻」の項からも判るように昼と夜の区別・時刻・それらを推定させる表現を伴わない事例が大多数である。管見の史料でも同じである。時間の問題は案外、重要でないのかも知れない。

次に妖怪現象を体験した(と噂される)人物の個人的属性(社会階層など)の問題である。本章では体験者を無視して世間話の受容者・伝承者だけを想定した。なぜなら世間話という史料は現実に事件を体験した人物が無くとも、その噂にリアリティを感じ、噂した受容者・伝承者がいることが重要であるからである。したがって体験者にでっち上げられた人物の問題はさほど重要ではない。

第三には江戸の個々の「不思議の場所」の問題である。例えば、なぜA屋敷には妖怪が出るのに、B屋敷には出ないのかという問題である。これは当時の詳細な状況を復原する必要がある。この問題は現代で同様のテーマを扱う場合、有効となろう。

① 稲田浩二「昔話・伝説・世間話」国文学解釈と鑑賞昭和五〇年一一月号、学燈社、一九七五年、四四〜五三頁。また〝都市の〟世間話については拙稿を参照のこと。「都市の世間話——ブルンヴァン『消えるヒッチハイカー』を手懸りに——」京都民俗七、一九八九年、一三三〜一三九頁

② 宮田登『都市民俗論の課題』未来社、一九八二年、二〇二〜二二二頁

③ 日野龍夫『江戸人とユートピア』朝日新聞社、一九七七年、二七頁

④ 戸塚ひろみ「世間話の都市性」歴史公論九二(都市の民俗)一九八三年、五二〜五三頁

⑤ 柳田国男『一目小僧その他』定本柳田国男集五、一九六二年、二七頁、広田収「噂の魅力」『民間伝承集成一五・月報』創世紀、一九八二年、四頁

⑥ 『耳嚢』は天明〜文化年間(一七八一〜一八一八年)に南町奉行、根岸鎮衛が市中の世間話を収録した随筆。全一〇巻、収録話数一〇〇〇話。

⑦ 森銑三「耳嚢とその著者」書物展望二—六、一九三二年、二〜七頁

⑧ 内田順文「地名・場所・場所イメージ——場所イメージの記号化

に関する試論――」人文地理三九―五、一九八七年、一～一六頁

⑨ 本稿で念頭に置く江戸の範囲は、文政元（一八一八）年の江戸朱引図の朱引・黒引の内側である。

⑩ この研究動向は拙稿参照。「場所の意味論――民俗学と地理学の接点――」京都民俗五、一九八七年、四一～五〇頁

⑪ 幽霊の若干の事例も除外した。それは『耳嚢』巻六に怨む相手の所に現われず、同じ地点に毎夜現われる幽霊の怪異譚に対し、市中の評判は「霊鬼にも心得違いもあるものなり」とあり、幽霊は特定の地点に憑かないのが一般的とするからである。また柳田も同じ説を唱えている。

⑫ 宮田登『江戸歳時記』吉川弘文館、一九八一年、一七六頁。白幡洋三郎「花見と都市江戸」中村賢二郎編『歴史のなかの都市――続・都市の社会史――』ミネルヴァ書房、一九八六年、一九二～二一四頁。また非日常的な施設、例えば三昧（茶毘所）や富士塚も周縁部に位置する。福田アジオ「高田富士と落合の火葬場――江戸の周辺としての戸塚・落合――」新宿区教育委員会編『地図で見る新宿区の移り変わり（戸塚・落合編）』一九八五年、四九八～五〇六頁

⑬ 平戸藩主松浦静山が著した随筆。正編一〇〇巻、続一〇〇巻、第三編八〇巻。収録話数六〇〇〇話。この中に多くの世間話が含まれる。

⑭ 鈴木棠三「耳袋・解題」東洋文庫『耳袋一』平凡社、一九七二年、四〇四頁

⑮ 浜田義一郎編『江戸切絵図Ⅱ近吾堂版』東京堂出版、一九七五年の索引を参照。

⑯ 本稿での霊験とは、神仏に一心に帰依する人に奇蹟が起こり、利益があること、あるいは神仏を疎かにした人に不思議な天罰が下ること、を意味する。また浅草観音に纏わる霊験譚はたとえば滝沢馬琴『兎園小説』に多く収められる。

⑰ 内藤正敏「俗なる聖地――浅草寺と江戸のご利益――」『現代宗教三、聖地』春秋社、一九八〇年、五五～七一頁

⑱ 小松和彦『憑霊神仰論――妖怪研究の試み――』ありな書房、一九八四年、一一～八一頁

⑲ 時代は少し遡るが享保一〇（一七二五）年の人口密度は江戸全体で一八、五九〇人／㎢、その中で武家地で一三、九八八人／㎢、町人地で六八、八〇七人／㎢であった。大名下屋敷の人口密度は武家地のそれよりも、はるかに低くなると思われる。また江戸後期になれば、町人地の人口密度が一層高くなるのに対し大名下屋敷のそれはほとんど変わらない。内藤昌『江戸の町(下)――巨大都市の発展――』草思社、一九八二年、八二・八三頁。ところで大名屋敷で憑きものが伝えられないのは主君の恥となるのを恐れて口外しなかったとも考えられるが、動物の怪は口外されるので、この推測は否定される。

⑳ 宮田登は浅草を含めた大川沿岸を「ハシバ（橋場）空間」と呼び、他界との接点とする。しかし宮田は中世から近世初頭の史料をもとに立論しており、東岸（本所・深川）の開発が進み、市街化した近世後期の議論には参考とならない。宮田「水の都のフォークロア――ハシバ空間をめぐって――」西山松之助先生古稀記念会編『江戸の芸能と文化』吉川弘文館、一九八五年、四五五～四七一頁

㉑ 正井泰夫「江戸時代の都市の自然環境――江戸を中心に――」地理二二―二、一九七七年、三九～四七頁。明治に入っても山手の自然環境はあまり変わらず、田山花袋は次のように記している。

「段々開けて行くといってもまだ山手はさびしい野山で、林があり、森があり、ある邸宅の中には人知れず埋れた池があったりして、牛込の奥には狐や狸などが夜ごとに出て来た。永井荷風氏の『狐』という小説に見るような光景や感じが到る処にあった。」（『東京の

三〇年』）

㉒ 滝沢馬琴は『兎園小説』第五集の中で「世に奇事怪談をひいても伝ふること、多くは狐狸のみ。貒、狢、猫の属ありといへども、これに及ばず。」と述べている。また狐狸の妖怪イメージについて荒俣宏・小松和彦『妖怪草子――あやしきものたちの消息――』工作舎、一九八七年、二七六～三〇〇頁を参照。

㉓ 大名屋敷は塀や門により空間的・社会的に遮断され、庶民はおろか公儀の警察力すら容易に立ち入れぬ空間であった。氏家幹人『江戸藩邸物語――戦場から街角へ――』中央公論社、一九八八年、七八～一一〇頁。また小寺武久によれば、江戸後期の大名屋敷は「将軍をも含めた武家たちにとって、庶民における盛り場や悪所のような、いわば秘められた聖域ともいえる場」だったという。『尾張藩江戸下屋敷の謎』中央公論社、一九八九年、一五一～一五六頁

㉔ 学問所教授方出役を勤めた桃野が市中の奇話怪談を筆録した書。全四巻八五話。朝倉治彦「反古のうらがき・解題」『日本庶民生活資料集成一六、奇談・紀聞』三一書房、一九七〇年、六四三・六四四頁

㉕ 陣内秀信『東京の空間人類学』筑摩書房、一九八五年、三六～六一頁。なお尾張藩下屋敷の庭園については小寺武久の研究（前掲註㉓）に詳しく述べられている。

㉖ 小寺武久、前掲註㉓及び長谷川正海『日本庭園雑考――庭と思想――』東洋文化社、一九八三年、一五八～一六四頁

㉗ 長谷川正海は、江戸後期の諸庭園で、池・島よりも築山が重視されたことは、江戸人の山・森に対する特別な意識と関わると示唆する。長谷川、前掲註㉖、一六二頁

㉘ 宮田登『終末観の民俗学』弘文堂、一九八七年、一一五～一二六頁。同様の意見を若月幸敏も主張する。しかし両者とも村落の民俗事例のみを拠所として江戸の坂を論じており、説得力に欠ける。「微地形と場所性」槇文彦ほか『見えがくれする都市』鹿島出版会、一九八〇年、一〇七～一一七頁

㉙ 『増補江戸惣鹿子名所大全』には三九ヶ所の坂が紹介されているが、多くは大名屋敷との位置関係から説明を始める。例えば「一、上瑠璃坂、一谷尾陽の御館の前にある坂をいふなり、尾陽の御屋敷高低ありて……」。そして現代の東京も台地端に点々と林地を残すが、明治の地形図を見るとその様子が一層良く判る。また坂に化物屋敷があったり、狐狸の怪が坂で起こることは著者不詳『梅翁随筆』巻二「妖怪物語並夜女に化し事」など同時代史料に見える。

㉚ この怪について『遊暦雑記』は次の五点の特徴を記す。(1) 昼・夜とも妖怪が出現。(2) 小用を催すのは妖怪出現の前兆。(3) 妖怪の姿は様々に変化。(4) 火災の前に鉄棒を引く音。(5) 火災時は倉の家財を妖怪が守る。

㉛ 飯島吉晴『竈神と厠神――異界と此の世の境――』人文書院、一九八六年

第三章　怪異小説にみる不思議の場所

本章では、近世後期の江戸人が享受した怪異小説「不思議の場所」を記述する。

1　小説と場所

一定の水準を超えた、例えば多数の読者を得た小説は周到な構造を持っている。① モチーフの連鎖、作中人物の性格や人間関係な

どの綿密さが我々の目を引く。一方、数々の場面も的確に構成された諸要素から成り立っている。例えば空間という要素にも、作者の意識的なあるいは無意識的な、周到な場面設定が潜んでいると考えられる。[2] 前田愛は

「読者が心の視野の中心部に見すえているのは、ふつうは作中人物の心理や行動であり、プロットの展開であるからだ。しかし「図」として志向されている中心部分の意味を限定し、鮮明な像として浮き上がらせているのは、無意識の領域でサブストラクチャーとして構造化されている「地」の部分、つまりテキストの「内空間」なのである。作中人物の生の地平を開示し、限定する枠組として作用しつづけるテキストの「内空間」の役割は意外に見逃されている。」

と述べている。[3] 前田の「内空間」は言い換えれば「場面」とほぼ同意である。そしてこの中でも空間が最も重要なので、空間という視点から小説を解読する作業が「文学のテキストを読みすすめる過程」の本質であると彼は主張する。従って小説の中で設定・展開される空間は、登場人物にとって意味に満ちた「場所」を形成すると同時に語り手や登場人物とまなざしを共有する読者にとってもそれらの空間は同様の「場所」となると考えられる。また多数の読者を獲得し、彼らに共感を与える小説の中の「場所」は彼らと同じ社会的・文化的背景を持つ人間集団にとっても同様の「場所」となる可能性が高い。多田道太郎によれば、小説において筋や主題よりも生活空間の表現にこそ作者の無意識、ひいては時代と社会の無意識が浮き彫りにされるという。[4]

本章では近世後期の江戸人に受容された怪異小説群で「不思議の場所」として描かれる空間を通覧する。従って、それらの「不思議の場所」は個々の怪異小説の中の場面設定として必要不可欠な空間であると共に、作者とほぼ同時代の読者が無意識にフィクションの中で受容する「不思議の場所」の共通項であると考えられる。

2 史料

(1) 怪異小説

近世の怪異小説には二回の最盛期があったと言われる。[5] 第一期（寛文―元禄）では中国の志怪小説を日本風にした翻案小説の時代である。浅井了意の『伽婢子』など版元は上方、読者も上方の知識人層が中心であった。そして第二期（宝暦・明和）の怪異小説はその内容により幻想小説と百物語系とに分類できる。前者は上田秋成の『雨月物語』など高度な文芸性を持った小説群である。その緻密な構成故に読者は上方・江戸の知識人に限られたようで

ある。またこの版元は上方が多かった。一方、百物語系は文章に修辞や典拠が少なく、説話性と短編構成が特徴である。この小説群の版元は上方から江戸へと移り、読者は内容の平易さから江戸の町人を広く含んでいた。[6]

従って本章で検討する史料として、近世後期に江戸人の読者を得た百物語系怪異小説が適切と考えられる。[7]そこで当時の代表的な小説五編『御伽空穂猿』[8]『怪談登志男』[9]『萬世百物語』[10]『太平百物語』[11]『御伽厚化粧』[12]（総話数一二八）を史料とする。この五編に共通する特徴として次の四点が指摘できる。

1．『太平百物語』以外、時代設定が過去である。しかも厳密な年代設定をしていない。
2．江戸以外が舞台となる諸国咄の形式を採る。しかも詳しい地名を明示しない。
3．登場人物が匿名であるなど、特定できない。
4．間接的伝聞の表現を伴う。

これらは怪談の内容が読者である江戸人にとって明かに別世界の出来事であり、世間話のようなリアリティが無いことを示している。

(2) 世間話と怪異小説の比較

そこで世間話と怪談小説を、その舞台となる時間・空間・（登場）人物の3点から比較することにより、それらの意義を確認したい。

	時間	空間	人物
世間話	現在（同時代）	江戸（特定）	実在（特定）
怪異小説	過去（不特定）	諸国（不特定）	匿名（不特定）

右の表からも両者の江戸人にとってのリアリティの差が出るように思われる。なるほど怪異小説の作者が怪談のネタを実在の事件に求めた可能性は十分有り得る。「皆近世の事實にして」（『怪談登志男』跋）、「出所の正しきのみ集めて」（『太平百物語』序）という言葉は認めるとしても、右の表を見れば怪異小説はやはりフィクションである。[13]例えば怪談小説では江戸の人々には馴染みの無い地方が舞台となる。当然ながら細かい地名を記すことはない。つまり諸国咄の「諸国」は読者にとって別世界、空想世界という意味である。怪異小説の内容は当時も「ある事なき事短きを専らに廻した」（刊年・作者不明『怪談老の杖』巻四）であり、「なき事ばなし」（宝暦二年落首）と考えられていた。

但し怪異小説にも地名を伴わない空間の表現がある。例えば山

上の祠（道祖神の社）に明神（土地の神）が現れたり（『怪談登志男』一巻一話）、座敷で童子が怪異を起こす（同一巻四話）という描写である。これらの空間の選定に作者の周到な場面設定があると考えられる。本章ではこのような空間に着目したい。

3　怪異小説の不思議の場所

本節では五編の小説で如何なる場所が「不思議の場所」に選ばれているかを記述する。ただし怪談以外の話もあるので、抽出した事例数は八八例（第2表）である。

さて「不思議の場所」を前章と同じく家屋内部と家屋外部に分けて検討する。

まず家屋内部では、妖怪出現の場合は座敷・厠・蔵などが、幽霊出現では戸口・縁側・井戸などが「不思議の場所」に選ばれている。いずれも民俗学・人類学の議論で境界性・両義性の高い空間として知られている。[14] 例えば

「かれが座敷三間四方、昔晋請の物好もよく、奇麗に構へし一間なるが、何の頃よりか目なれぬ調度取りちらかしたる時もあり、一二、三のわらべ美目形清げなるが、文など見入て居たるときもあり、又は座敷に応ぜざる俵物數をおおくつみ重て、半時計置時もあり、或は武具馬具きらびやかに飾り並べ、又は小法師二三人出戯れあそぶ事もあり。」（『怪談登志男』一巻四話）

という一節があるが、この座敷を持つ家は「富榮ける」とされ、昔話の龍宮童子譚（座敷童子の物語）が想起される。

そして家屋外部では、山姥の住む深山（『御伽空穂猿』五巻一四話）幻が現れる海上（『怪談登志男』四巻二〇話）や寺院（墓地）・渡し場などが「不思議の場所」である。[15] とりわけ山中が重要であると思われる。[16]

「世に化物ありといへども、われ此年月三昧をはじめ、あらゆる深山幽谷、すべてあやしとおもう所は、何國ともなく子丑寅の比ほひまで、毎度うかがひ歩く」（『太平百物語』三巻二五話）

「かく山ふかくいたりて是程のふしぎさへも見ねば、めずらしき心地し、いかさまやうあらんと……」（『萬世百物語』一巻三話）

特に山中の辻堂・峠・滝壺・洞窟などが「不思議の場所」の重要地点として描かれている。

第2表　怪異小説にみる不思議の場所

＊は幽霊の話

（　）内は文脈から推定される状況

御伽空穂猿

巻／話	時刻	空間	現象
1／2	（昼）	山中	庵	猿達が人間に化ける。僧が懲らしめる。
＊2／4	深夜	町屋	枕元	亡霊が現われる。
2／6	夜	大名屋敷	雪隠	老猿が妖怪の姿で現われる。
＊3／9	（深）夜	町屋	戸口・仏前	亡霊が現われる。
4／11	夜	寺	山門	仁王像が妖怪となる。
4／12	夜	寺	堂	絵馬の精が現われる。
5／14	夜	（深）山	厳穴	山姥（娘に化ける）がいる。

怪談登志男

巻／話	時刻	空間	現象
1／1	子の刻（夜）	山上	祠（道祖神）	明神が現われる。
1／2	？	山中	寺	天狗が寺を何代もの間、守る。
1／3	丑みつ過八ツ（夜）	荒屋敷		様々な変化が現われる。
1／4	？	町屋	座敷	童、小坊師ほか様々な変化。
1／5	夜	寺		狐が高僧に化ける。
＊2／6	朝	町屋	庭	亡霊が現われる。
2／7	夜	荒屋敷		様々な妖怪が現われる。
＊2／8	（夕）	町屋	柴戸・縁	亡霊が現われる。
2／11	？	町屋	庭の穴門（口）	無間地獄に通じる。
3／13	宵	？		妖怪（狐？）が女に化ける。

萬世百物語

巻／話	時刻	空間	現象
3／15	（昼）	神社	森	狐？が女に化ける。神の使い。
4／20	（夕）	海上		あやかしが起こる。
5／22	夜	武家長屋	厠	妖怪が現われる。
5／26	（昼）	畑	道	姿を消した天狗が子供をさらう。

巻／話	時刻	空間	現象
1／1	夜	森		妖怪が住む。
2／5	夜	山中（寺）	厠	一眼一足の妖怪が現われる。
2／7	夕	？	井	亡霊が現われる。
2／8	夜	寺		仏？が少年に化ける。
3／10	夜	大名下屋敷	厠	大古狸が死者に化ける。
3／11	（昼）	（寺）		大古狸が男に化ける。
3／12	（夕）	寺		龍が老夫婦に化ける。
4／15	未の刻（昼）	渡		疫神が女に化ける。
5／17	夕	山中（寺）	築山	天女？が現われる。野原が宮殿になる。
5／20	夜	寺		大狸が歌い舞る。

太平百物語

巻／話	時刻	空間	現象
1／1	夜	墓原		狐が様々に変化する。
1／2	日暮れ	道		狐が僧・武士に化ける。
1／3	（昼）	商家	庭	狐が大入道に化ける。
1／5	夜	（市中）		狐に化かされる。
1／6	夜	山中	辻堂	化物が現われる。

1/7	（昼）	（神社）			天狗が老人に化け相撲をとる。
1/8	？	（百姓家）	絵		絵の中から女が現われる。
1/9	夜	山中	峠の家		山姥が現われる。
2/11	（昼）	川辺			河獺が人に化ける。
2/12	？	山中			天狗が若僧を空中につかむ。
2/13	夜	山中			僧と姿の見えない天狗が問答する。
2/14	夜	市中			亡霊が現われる。
2/15	子の刻（夜）	（市中）			妖怪が童・女・古入道の姿になる。
1/16	夕	山中	坂		猿・熊・狼・狸などが異形の者になる。
2/17	丑三つ（夜）	（家）			古狸が娘に化ける。
2/18	夜	野中			化物が現われる。
2/19	（夜）	商家	戸口		狐が人に憑く。
2/20	（昼）	寺	方丈		猫が女に化ける。
2/21	？	墓地			女が蛇に変わる。
3/22	夜	（市中）	庵		狐の石打。
3/23	夜	森	社		邪神が現われるが、不動明王が懲らしめる。
3/24	夜	山中	峠		火の魂、亡霊が現われる。
3/25	夜	山中			天狗が様々の変化を行なう。
3/27	夜	山中	庵		妖術を操る女が山中に隠住する。
3/28	？	海上			老亀が天に昇る。
3/29	？	山中			狩人の妻に熊が憑く。
3/30	夜	（家）			狐が亡妻に化ける。
3/31	？	（家）			殺された女が報復する。
3/32	（夜）	武家屋敷	奥の間		亡猫が女に憑く。
4/33	（昼）	別荘	縁		蜘が人に化け、男を誑かす。

4/35	夜	家	軒芝・縁		亡妻の幽霊が現われる。
4/36	（深）夜	武家屋敷	塀の上		ろくろ首が現われる。
4/37	夜	町屋			狐が念仏を唱える。
5/39	未午（昼）	三昧			狐が人を化かす。
5/40	夜	池堤			狐が馬の足音で人を化かす。
5/41	夜	商家	蔵		力士像が盗人を懲らしめ蔵を守る。
5/42	（昼）	寺	縁		死者の気が現われる。
5/43	（深）夜	屋敷	厠		老猿が化物となり現われる。
5/44	夜	（家）	厠		古猫が人を化かす。
5/45	夜	屋敷			亡熊の霊が変化を起こす。
5/46	（昼）	田地			かわうそが童に化ける。
5/47	丑みつ（夜）	町はずれ			古狸が様々に変化する。
5/48	子の刻（夜）	（家）			化物が現われる。
5/49	夜	山中・別荘			天狗の災いがある。

御伽厚化粧

／話	時刻	空間		現象
1/1	（昼）	霊山	滝壺	童子が現われ、宮殿へ誘う。
1/2	（夜）	神社		夢の中で碁の精が現われ、目覚めると傍に碁があり。
1/3	夜	山中	堂	芭蕉の精が現われる。
2/4	？	大藪		狐が人の姿で現われ、藪中に隠里を造る。
3/7	昼	田の畦		夢の中に蛙が人の姿で現われ報恩する。
3/8	昼	山中		巨大な百足が現われ、鷲（神の使）に救われる。
3/9	夜	墓		鬼火が飛びまわる。
4/10	夜	寺・（家）		猫が死者を繰る。女に化ける。

4／11	九ツ（夜）	町はずれ古屋	上り口	古面の精が女の姿で現われる。
4／12	夜	山中	古塚	平家の亡霊が座頭をまどわす。
5／13	（昼）	畑の道		狐が人に化ける。
5／14	昼・九ツ	山中	窟	かわうそが大坊主に化ける。老狐に討たれる。
5／15	夜	山中		鬼が現われる。

*

4　怪異小説と昔話

前節から判るように江戸の人々が受容した怪異小説の「不思議の場所」は、第一章で触れた村落社会のそれと類似する。そして怪異小説といわゆる昔話の類似も想定される。そこで本節では、この類似こそが怪談小説及びその「不思議の場所」を江戸人がフィクションとして受容した原因ではないかということを論じてみたい。

まず怪異小説で描かれる「不思議の場所」のモチーフとして「隠れ里」が指摘できる。「隠れ里」は村落社会の人々がしばしば想定する異界のパターンの一つで、民俗学者が注目してきた。[17]以下、事例（要約）を示そう。

事例1．一人の風流人が熊野の山中で一軒屋に宿を借りる。一軒屋には若い女がただ一人住んでいる。女は百年以上ここに住むと言い、妖術を繰って小箱から召使たちを出し男をもてなす。男は女の妖術で往来に送り出されるが、振り返れば幾重にも山々が重なるばかりである。（『太平百物語』三巻二七話）

事例2．家の裏に大藪を持つ男がいる。そこへ一人の老人が来て「竹を一本も切らないので藪の中に住ませて欲しい」と頼む。男が許可すると、老人は「非常時には力になるので呼んでくれ」と言って消える。二〇年ほどたって男の妻が大病になったので、男は藪で老人を呼ぶ。現れた老人の薬で妻は元気になる。男は老人の招きで藪に入ると、立派な御殿がある。男が帰ろうと門を出て振り返れば深い藪が広がるばかりである。（『御伽厚化粧』二巻四話）

事例3．柳瀬桃沢子は絵を善くする風流人である。彼は江戸から箕面へ遊山する。深山の中の滝の前でまどろむと、童子二人が現れ彼を滝壺へと誘う。滝壺の向こうに宮殿があり、天女が彼を迎える。天女の望みに答え、彼は絵を描き、もてなされる。彼が帰ろうとし、気が付くと滝の前に立ちつくしている。傍らに天女がくれた玉の硯と筆がある。（『御伽厚化粧』一巻二話）

同様の「隠れ里」のモチーフは『萬世百物語』五巻一七話、『怪

談登志男』二巻七話、『太平百物語』三巻二七話、『御伽厚化粧』三巻七話、四巻一二話に見られる。[18]

次に怪異小説の中に昔話的要素が多くみられることが指摘できる。先の「隠れ里」もその一例であるが、昔話的要素の複合がみられる例も多い。

事例4．武州八王寺に善助・孫助という兄弟がいた。兄の善助は貧乏だが善良である。一方、弟の孫助は金持ちだが性格が悪い。ある日、兄の頼みで弟は籾種と蚕を貸す。兄が成功しそうになると弟は邪魔をする。やっと稲一穂が大きく育つが、雨に奪われてしまう。兄が鳥を追って山に入ると、子鬼達が打出小槌から欲しいものを何でも出している。兄は子鬼の忘れた小槌を持ち帰り、金持ちになる。弟はこれを羨み、兄の真似をして山中に入るが、親鬼に捕えられ鼻を抜かれる。弟は死に、兄は幸せな人生を送る。（『御伽厚化粧』五巻一五話）

この事例は一見して我々のよく知る昔話の要素を多く含んでいる。関敬吾の昔話分類を参考にすれば「隣の爺」（例：瘤取り爺）、「継子譚」（例：一寸法師）などのモチーフが複合して一話を成立させていることが容易に読み取れる。[19] 本章で検討した五編の怪異小説の中にも典型的な昔話と類似、あるいは教話の昔話から構成されている小説も多い。

以上より、怪異小説と昔話の類似がやはり想定される。これを確認するため怪異小説と昔話を、それを構成する時間・空間・人物の三点から比較した。参考として民話の他のジャンル、神話・伝説とも比べた。[20]

		時間	空間	人物
怪異小説		過去（不特定）	不特定	不特定
民話	昔話	過去（不特定）	不特定	不特定
	神話	過去（原古）	宇宙	神
	伝説	過去（特定）	特定	特定
	世間話	（前掲のため省略）		

怪異小説の構成は昔話の構成と一致し、神話・伝説のそれとは異なる。今まで怪異小説と昔話の類似をめぐる文学史的議論は全く行われていないが、本章でその文学的系譜は重要ではない。重要なのは怪異小説と昔話の類似が江戸の町人の共感を呼んだ原因ではないかということである。河合隼雄によれば、昔話は日本人の深層心理に関わり、時代・文化の相違を超えて日本人の共感を呼ぶ、という。[21] したがって江戸の町人はある意味で怪異小説を通していわゆる昔話を読み、聞いていたとも考えられる。やはり怪

異小説に描かれる「不思議の場所」は、やはり江戸人に受容されて然るべき空間であったのだろう。

5 小結

本章では、江戸後期の江戸人が怪異小説の中で受容した「不思議の場所」を記述した。その結果、次の二点が明らかとなった。

(1) 怪異小説において次の空間が「不思議の場所」に選ばれる。家屋内部では座敷・倉・厠などが、家屋外部で山（の辻・峠・滝・洞窟）などが「不思議の場所」として描かれる。

(2) この「不思議の場所」は村落のそれと酷似することから、江戸人は小説の中で村落モデルの「不思議の場所」を受容したと換言できよう。

最後に、三点を確認しておきたい。まず怪談小説で妖怪出現の際に、世間話と異なり「夜」が強調される。これは読者の共感を得るための周到な場面設定だったと考えられる。次に怪異の内容も世間話の場合と違い、動物の怪異が少なく山姥・天狗など民間伝承にしばしば見られる妖怪の怪異が多い。第三に本章では妖怪現象の内容と空間と対応には事例数の少なさから触れなかった。

① この構造主義の立場から小説の分析を行う研究者は多い。次の文献参照。R. Barthes, 'Introduction à l'analyse structurale des récit', *Communications*, 八―一～二七、一九六六年（R・バルト『物語の構造分析』花輪光訳、みすず書房、一九七九年）

② 人文主義地理学の立場による文学研究も同様の前提に立つ。例えば C. D. Pocock (ed.), Humanistic Geography and Literature, Croom Helm, 一九八一年を参照。但しこれらの研究が具体的な地域を対象にするのに対し、本章では地名を伴わない抽象的な空間を対象とする。Yi-Fu Tuau の研究は本章と類似の関心を持つ。例えば Landscape of Fear, Basil Blackwell, 一九八〇年。

③ 前田愛『都市空間のなかの文学』筑摩書房、一九八五年、引用は六頁。

④ 多田道太郎『風俗学――路上の思考――』筑摩書房、一九八一年、六九～八三頁

⑤ 日夏耿之助「徳川怪異談の系譜」『日夏耿之助全集四』河出書房新社、一九七六年、七五～一一一頁 及び野田寿雄「怪異小説の展開」国文學解釈と鑑賞二六―一、一九六一年、六五～七二頁

⑥ 太刀川清「宝暦・明和の百物語」国語国文研究四八、一九七一年、五〇頁（『近世怪異小説研究』笠間書院、一九七九年、所収）

⑦ 野田寿雄、前掲註⑤、太刀川清「太平百物語と古今百物語――伽婢子系怪談小説のゆくえ――」国語国文研究五二、一九七四年、四一・四二頁

⑧ 摩志田好話作。元文五（一七四〇）年、江戸初刊、五巻一六話。日本各地を舞台とする諸国咄の形式。「むかし」で始まる話が多く、時代設定は過去。以下註⑫まで朝倉無声「怪談小説・例言」『徳川文芸類聚四』国書刊行会、一九一五年、五・六頁を参照。

⑨ 斬雪舎素及作。寛延三（一七五〇）年、江戸初刊、版元は須原屋太兵衛、五巻二七話。諸国咄の形式。「今はむかし」で始まる話が

多く、時代設定は過去。

⑩ 烏有庵作。寛延四（一七五一）年、江戸初刊、版元は和泉屋吉兵衛、五巻二〇話。諸国咄の形式。「あだし夢」で始まり、時代設定は過去。この小説は元録一〇（一六九七）年初刊の『雨中の友』を原本とするが、その内容は江戸後期の作品として評価される。太刀川、前掲註⑥、一一二頁

⑪ 菅生堂人恵忠居士作。享保一七（一七三二）年大坂初版、版元は河内屋宇兵衛、五巻五〇話。西日本各地を舞台とする西国遊歴咄の形式。

⑫ 筆天斎作。享保一九（一七三四）年、大坂初刊、版元は本屋長右衛門、五巻一五話。諸国咄の形式。時代設定は過去。

⑬ 高田衛は、この諸国咄の本質は世間話ではないのか、と示唆する。しかし江戸人にとってのリアリティという点で、諸国咄と（江戸以外の）世間話は若干、質が違うように思われる。高田『江戸幻想文学誌』平凡社、一九八七年、一～四頁

⑭ 飯島吉晴『雷神と厠神――異界と此の世の境――』人文書院、一九八六年、九～一四頁

⑮ 怪異小説では、読者に「不思議の場所」を感じさせるための表現に工夫が見られる。特に、物寂しい情景の描写が多い。

「くれ竹の生しげり、草葉の露きらめき、空とぶ鳥の声衣打音、かなたこなたにひびきあいて、取りあつめたるもののあはれ……」（『御伽空穂猿』二巻六話）

「門もふけたりといへども、柱かたぶき倒れ、軒端は荒れ月さし入りたる、くまぐまには蜘の家居の糸引はへたり」（『怪談登志男』二巻七話）

⑯ 山中他界観は日本文化の中で最も重要な他界の観念であるとされる。白石昭臣「山中他界観」宮田登編『講座日本の民俗宗教三・神観念と民俗』弘文堂、一九七九年、一三六～一五八頁

⑰ 柳田国男『一目小僧その他』定本柳田国男集五、筑摩書房、一九六二年、二三〇～二五八頁

⑱ 近世小説一般に隠れ里的発想が多く見られ、佐々木孝二はこの発想を「人々の心の奥に自然と根をおろす性質」と評している。佐々木「隠れ里説話と近世小説」国語国文研究四六、一九七〇年、一九～三一頁

⑲ 関敬吾（編）『日本昔話集成』（全六巻）角川書店、一九五三年を参照。

⑳ 大林太良『神話学入門』中央公論社、一九六六年、四四～六一頁、などを参照。

㉑ 河合隼雄『昔話と日本人の心』岩波書店、一九八二年

おわりに

江戸人が世間話・怪異小説で受容した「不思議の場所」に関しては、第二・三章の小括で述べたので繰り返さない。ここでは第一章で提出した課題に対し筆者なりの解答を示しておきたい。

江戸という大都市において、「不思議の場所」の村落モデルが適用できるのは、家屋レヴェルの空間である。家屋外部の「不思議の場所」は江戸独自である。そして辻と橋は江戸では「不思議の場所」として必ずしも重要とは思われない。ただし江戸人が受容した怪異小説では村落モデルの「不思議の場所」が描かれている。

そこで次の二点が今後の課題となろう。

まず大名屋敷などの庭園が江戸人の「不思議の場所」となるメカニズムの解明である。これは「場所」を形成する歴史的過程と社会的文脈の中で解明されねばならない。①

次に世間話と怪異小説相互の「不思議の場所」の関係が問題となる。特に家屋外部では前者で大名屋敷の庭園が重要であり、後者では山中が選ばれる。この両者の連関を議論する必要がある。推測であるが彼らの「山」に対する意識がこの問題を解く鍵となろう。この時期の人々は江戸市中に疑似的な「山」を求めている。②台地端の屋敷の森を山中に見立てたことは想像に難くない。③

ところで冒頭でにも述べたように本稿は人文主義の立場に立つ歴史地理学的試論である。従って「場所」の理解のための「記述」を試み、一定の成果を得たと考えている。方法論的問題は稿を改めて考えたい。

① 拙稿「歴史地理学の人文主義的展開・試論（要旨）」人文地理四一―六、一九八九年、八六・八七頁

② 江戸後期に町人は約三〇基の富士塚を市中に建造する。この人工富士は現実世界におけるミロク浄土、擬似他界である。野村幸希「富士塚考」『宗教社会史研究』雄山閣、一九八五年、六一二頁、宮田登『ミロク信仰の研究』未来社、一九七五年、一五二頁。また本文中でも触れたように築山を中心に山中を模した江戸式庭園が流行し、町人上層にも及ぶ。

③ 江戸後期に台地端を〇〇山と呼ぶことが流行する（明治以降は〇〇台が一般的）。『江戸学辞典』弘文堂、一九八四年、六五頁。江戸人は日常生活に欠けていた無秩序・（文化に対する）自然性・他界性を求めていたのではあるまいか。村落社会の世界観は空間的には里／山の対立で成立しており、この組合せが、秩序／無秩序、文化／自然、此界／他界に対応すると思われる。江戸人にはこの組合せの後者が欠けており、それを回復するため、疑似的な「山」を求めたとは考えられないだろうか。

（うちだただよし、京都大学教養部助手）